

災害避難所に対する避難所未経験者の生理心理反応に関する研究：防災教育手法提案の一助を目指して

岸田, 文

<https://hdl.handle.net/2324/4060243>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (感性学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 岸田 文

論 文 名 : 災害避難所に対する避難所未経験者の生理心理反応に関する研究
－防災教育手法提案の一助を目指して－

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、災害関連死を最小限にするために、避難所に関する防災教育を効率よく行うための教育方法を個人の特性である性格特性の観点から検討することである。

第1章では、災害大国である日本において、避難所生活でのストレスによって生じる災害関連死が問題となっており、それを減ずるために避難所生活に関する効果的な防災教育手法の考案が必要であることを述べた。また、有効な防災教育を考案するためには、客観的な評価が必要であることを述べた。なお、避難所未経験者は避難所に対してネガティブな先入観を持つ可能性があり、ネガティブな先入観の持ちやすさは性格特性の影響を受ける可能性があることを示した。さらに、性格特性の違いによって防災教育の効果も異なる可能性があることを述べた。したがって、本研究では有効な防災教育手法の提案の一助を目指して、避難所未経験者がどのようなネガティブな先入観を持つのか、さらにどのような性格特性を持つ人がその先入観を持ちやすいのかを明らかにし、その上で性格特性に応じた防災教育手法を提案する必要があることを述べた。

第2章では、ネガティブな印象の客観的評価法の妥当性を検討するために、誰もが経験したことのある一般的な公的サービスである市役所を用いて、人々が市役所に対してどのような負の印象を持ちやすいのか、さらにどのような性格特性を持つ人がそのネガティブな印象を持ちやすいかを質問紙を用いて客観的評価を試みた。具体的には、ポジティブな印象を評価するために使用されているSERVQUALを用いてネガティブな印象の評価し因子分析によってネガティブな印象の因子構成を検討した。さらに、抽出された因子を従属変数、性格特性としてBig five及び共感性を評価するIRIを独立変数とし、重回帰分析による検討を行った。その結果、元々サービスに対するポジティブな印象を評価するSERVQUALを用いてネガティブな印象を評価した場合、ポジティブな印象を評価した際に得られる構成因子と同様の因子が抽出された。さらに、既に先行研究において示されているサービスに対する評価と関連する性格特性が本研究においても抽出された。このことから、本研究結果は先行研究を追認する妥当な結果であることが示された。つまり、因子分析を用いて市役所に対するネガティブな印象の構成因子を抽出し、さらに重回帰分析を用いてネガティブな印象を持ちやすい性格特性の抽出ができることが示された。そこで、第3章では、第2章と同様の方法を用いて、避難所未経験者が持つ避難所に対するネガティブな先入観について検討することとした。

第3章では、第2章と同様の客観的評価手法を用いて、避難所未経験者が持つ避難所に対するネガティブな先入観について検討した。その結果、避難所に対するネガティブな先入観は「情緒的支援の不足」と「手段的支援の不足」の2因子で構成されることが明らかになった。さらに、IRIの認

知的共感性が低い人ほど、避難所は情緒的支援が不足しているというネガティブな先入観を持ちやすく、**Big five** の誠実性が高い人ほど、避難所は手段的支援が不足しているというネガティブな先入観を持ちやすいことが明らかになった。このことから、避難所に対するネガティブな先入観を低減する上で、認知的共感性が低い人に対しては、避難所で発生し得る対人関係上の問題を想像させ、その問題が発生した際に対処できるような教育を事前に実施する必要があることが示唆された。誠実性の高い人に対しては、予め災害時の情報に関して発生した過去の問題点を把握させておくことが事前にできる対策の一つであることが示唆された。なお、被験者自らが考えて行動するような能動的活動を伴う教育的介入によって避難所へのネガティブな先入観が低減される可能性を示した。

第4章では、避難所生活を想像させるという教育的介入によって、避難所への注意処理過程が変化するのかを検討した。具体的には、タブレットを用いて避難所生活を想像させる条件と他者と対話しながら避難所生活を想像させる条件の2種類の教育的介入を実施し、その介入前後に避難所画像を呈示し、その際のP3a及びP3bについて検討した。その結果、「介入前」よりも「介入後」の方が有意に大きいP3a振幅が得られた。これは「介入後」において標的刺激である避難所画像が被験者にとって重要な刺激となり、注意処理過程を開始させるための注意資源をより多く割り当てたためであると考えられる。さらに、避難所に対する注意処理過程の個人差を検討するために、P3a及びP3bと性格特性との相関関係を調べた。その結果、認知的共感性及び情動的共感性が高い人ほど他者と対話しながら避難所生活を想像した後に、P3a振幅が大きくなることを示した。認知的共感性及び情動的共感性が高い人ほど他者と対話しながら避難所生活を想像すると、避難所生活を送る人の立場になったり苦しみに同情したりした可能性があり、避難所への重要度が大きくなったかもしれない。このことから、共感性が高い人にとっては、他者と対話しながら避難所生活を想像するという教育的介入は、避難所への注意の誘因となることが示唆された。しかし、逆に認知的共感性の低い人ほど介入の効果が小さいことが示され、避難所生活に関する具体的な知識を習得できるような教育的介入が有効ではないかと推測した。

第5章では、各章の要約及び本研究で得られた知見をまとめ、研究の限界点及び今後の課題を述べた。第2章では人々がどのようなネガティブな印象を持つのか、さらにどのような性格特性を持つ人がそのネガティブな印象を持ちやすいのかを質問紙を用いて客観的評価を試み、その評価手法が有用であることを確認した。第3章では第2章と同様の方法を用いて避難所未経験者が持つ避難所に対するネガティブな先入観について検討した。その結果、認知的共感性が低い人及び誠実性が高い人ほど避難所に対してネガティブな先入観を持ちやすく、ネガティブな先入観を低減するためには性格特性に応じた事前の学習が必要であることを示した。第4章では避難所生活を想像させるという教育的介入によって避難所への注意処理過程が変化するのかを検討した。その結果、他者と対話しながら避難所生活を想像するという教育的介入は、認知的共感性及び情動的共感性が高い人にとって避難所への注意の誘因となることが示唆された。しかし、認知的共感性の低い人にとって介入の効果は小さく、介入方法に検討の余地があることを示すとともに、共感性の程度によって教育的介入による避難所への注意処理過程への影響は異なることを示唆した。

なお、本研究では避難所未経験者の健康な大学生を対象としたため、得られた結果は高齢者や要援助者には援用は難しいかもしれない。今後は異なる母集団で検討していく必要がある。また、避難所生活の経験者による実際のネガティブな経験についても定量的に調査し、未経験者の先入観との一致あるいは乖離について検討していく必要がある。(2848字)